



・浦代浦では養福寺(図①)の石段二段を残すまで潮満ちる。高さ十一・五メートル(海拔)以下同)、死者十八人

・色利浦は西谷の広岡墓原の下(図②)まで、高さ十一メートル本谷は尾花の下(図③)、峰押の下坂口(図④)まで、高さ不明、死者二人

・小浦・竹野浦は死者なし

・宮野浦も死者なし。伝えによれば迎接庵(図⑤)は石段の下から三段目(印あり)まで潮満ちる。高さ七メートル

・以上から津波の高さは浦代浦十三メートル、色利浦十二メートル、宮野浦八メートルと推計されます。

(七)米水津湾は南東方向に開いているので、奥部の行きづまり浦代浦や色利浦では、高波を真正面から受けるばかりで波の逃げ場がありません。

宮野浦は北向きで湾の端に当たるため、波高も幾分減じたのでしょうか。

同じことは大島や蒲戸は被害が少なく、蒲江浦や丸市尾は南東向きのため被害甚大で、佐伯でも代後浦や鶴谷・堅田・木立の新地まで、同じであったということ、地形が最も影響したのでしょうか。

(八)浦々は家も家財も諸道具もすべて流失したが、間浦や

不太越(?)にも流れ寄り、多くは大灘(沖合い)に流れ出たと書いています。宮野浦では網で囲んで流れ出ないようにし、他所から流れて来たものを拾い揚げています。このような応急処置は人々から賞められました。災害発生の直後は、死人や怪我人もあつて大変な混雑であつたため、人々は流出した家財や諸道具を取り揚げませんでした。日数を経ると大変不自由した。こんなことは常に心得ておかねばならないと書いています。

(九)文中で「宮野浦は浦がら(柄)よし」とは地形がよかつた。その緊急処置がよかつたということを言っているのでしょうか、その頃の宮野浦はどんな様子だったのでしょうか。

それについて「宮野浦旧記」の天保十亥年写には、次のように記載されています。

「然るに右之所に遷座より廿一年を経て、宝永四年丁亥陽月未之刻天下一統大に地震す。時に此浦も皆悉波のために居家を損す。故に宮社も損壊すくならず、依之に自今のために議して、翌宝永五年戊子五月、前地を改めて後口の山頂に宮地をひらき、重而爰

に移し、かくのごとく造営し奉り畢、即今の宮社は是なり」

貞享四年（一六八七）、浦の正中に移して造営した天満神社は波打ち際の浜辺にあり、のち背後地に移築したのですが、石垣（高さ八ト）はこの津波を参考にして築造されたものと思います。

迎接庵はこの時より二十年前の貞享の頃、現在地に開山しており、石段まで波が打ち寄せているが、本堂の仏像は無事でした。

宝永三年（一七〇六）当時、鰯干浜の運上銀は五十目、家数十五軒、口数二十五、農地面積七反七畝、これは天保時代まで変わっていません。

享保十八年（一七三三）家数二十八軒二百四十六人、鰯小引網三帖。

寛政十一年（一七九九）家数三十軒二百三十人、鰯網二帖、この数字から宝永四年は家数二十軒位、人口百五十人位、鰯網二帖と推定されます。

浦の面積は東西九十間、南北二十間と記録があるので、米水津では最も小さな貧しい集落であったのでしようが、未曾有の災害復旧のため、集落一丸となって取り

組んだことでしょう。そのようなことがこの古文書から伺えます。

飢饉や不漁、天災地変等は江戸時代も多かったように思います。如何なる政治も天災には対応出来なかつたわけ、佐伯藩も困窮を極めたことでしょうが、それよりも百姓や漁民達はどんな暮らしをしていたのでしょうか。漁業の景気や年貢は、また、津波の時は何処に逃げたのか等、大変であったと思う反面、不憫さも募るばかりです。

台風銀座の中で暮らしている私たちにとって、台風に対応は上手くなつたとは思いますが、大地震や大津波にはどうでしょうか。

近年、いちじるしく改良された道路・海岸・防波堤等の公共施設や住居等、果たして充分と言えるでしょうか。何よりも私達住民の心構えが先決と考えます。

二百年、三百年も昔の事件を解読しながら、無事平穏を祈る昨今です。

寶永四年十月四日高潮之記録

一宝永四年十月四日昼之八ツ時二  
南之方お飛多し九鳴り時を不  
大地震致候而家内老人も不居立  
退候処又無程同時之下刻二波  
浦中ニ打渡シ浦白者一面湖之  
事とく相見へ申し候而色利浦は田の尻  
与り泥立其儘に古り皆人出んと  
思候所ニ沖より網さ王ぎ婦ル遠見候處  
波先ニ而少々相見汐差込事  
限り那く浦々家財屋敷共ニ  
畠迄も流申候浦白者養福寺  
迄も汐差込程ニ御座候處仏神之  
御加護を祈りて石壇ニツ計

宝永四亥年 高潮之記録

一宝永四亥年十月四日昼之八ツ時二  
南之方お飛多し九鳴り時を不  
大地震致候而家内老人も不居立  
退候処又無程同時之下刻二波  
浦中ニ打渡シ浦白者一面湖之  
事とく相見へ申し候而色利浦は田の尻  
与り泥立其儘に古り皆人出んと  
思候所ニ沖より網さ王ぎ婦ル遠見候處  
波先ニ而少々相見汐差込事  
限り那く浦々家財屋敷共ニ  
畠迄も流申候浦白者養福寺  
迄も汐差込程ニ御座候處 仏神之  
御加護ニ而御座候哉 石壇ニツ計

浦の中は利津志尾花の山峰押  
 の山八合迄は汐差申候 東網代者  
 廣岡之山 本谷者尾花之下迄  
 又 峰押之下者坂口迄 汐みち申候  
 西谷者廣岡之下墓原迄 汐差  
 込申候 色利浦二而 人式人死ス 浦白二而  
 拾八人死ス 小浦竹野浦二而者死人なし  
 其日北風少吹 克奈起二而 成程暖  
 成日寄故 色利浦者関網二流  
 寄 其夜ふ希て西風二成候處  
 家拾軒計 沖江流出候 浦白竹野  
 浦之家者皆大形 不太越 間浦へ  
 流三 荒々者大灘二も出申候  
 又 宮野浦者高汐二家浮候と

残り申候 色利浦者尾花の山 峰押  
 之山八合迄 汐差込申候 東網代者  
 廣岡之山 本谷者尾花之下迄  
 又 峰押之下者坂口迄 汐みち申候  
 西谷者廣岡之下墓原迄 汐差  
 込申候 色利浦二而 人式人死ス 浦白二而  
 拾八人死ス 小浦竹野浦二而者死人なし  
 其日北風少吹 克奈起二而 成程暖  
 成日寄故 色利浦者関網二流  
 寄 其夜ふ希て西風二成候處  
 家拾軒計 沖江流出候 浦白竹野  
 浦之家者皆大形 不太越 間浦へ  
 流三 荒々者大灘二も出申候  
 又 宮野浦者高汐二家浮候と

其儘網遠於起ま王し候故 所々  
 家財少も流不申候 阿まつさへ 外浦  
 之道具迄流寄候 其日与り翌  
 年迄漁事奈く 皆々難義致候へ共  
 宮野浦者浦加ら与し 殊二其時王損  
 奈き故 宝永五年子年中迄も  
 替り奈し 色利浦浦代浦者沙も  
 大分外浦よりミチ 地畠迄流候故  
 難義致申候 左様成時 宮野浦之  
 志王ざ 皆人本め介り  
 其往昔百年以前もケ様成汐満  
 申候事 年寄堂る人皆咄二承候間  
 能々 心之用心可有候 其時者皆  
 人死有者 家財奈起ゆへ 少之物取

阿け春日敷三つを皆徳のたき  
 阿け春日敷三つを皆徳のたき  
 徳をたき阿け春日敷三つを皆徳のたき  
 事也

一其時之高汐二 土佐阿波熊野地  
 大坂迄高波二而大破損御座候  
 佐伯者下浦二而 蒲江浦丸市尾浦  
 大破二及申候 又 中浦者大嶋より蒲戸  
 迄 少も破損奈し 代古浦より鶴谷  
 堅田木立村迄 新地大分津ふ連  
 申候而 皆々 難義致候間 大地震致候  
 得者 能々 心越付 用心可有候 且又  
 火難之節も常々之用心専一二  
 御座候間 為其 書記申候 以上

阿け春 日数立候得者 皆 諸事道具  
 入用二候得共 不自由二成申候間 常二  
 諸道具取阿希 心之用心可在  
 事也

一其時之高汐二 土佐阿波熊野地  
 大坂迄高波二而大破損御座候  
 佐伯者下浦二而 蒲江浦丸市尾浦  
 大破二及申候 又 中浦者大嶋より蒲戸  
 迄 少も破損奈し 代古浦より鶴谷  
 堅田木立村迄 新地大分津ふ連  
 申候而 皆々 難義致候間 大地震致候  
 得者 能々 心越付 用心可有候 且又  
 火難之節も常々之用心専一二  
 御座候間 為其 書記申候 以上